「ユダの裏切り」

ルカ 22:1-6

2020.11.15 南与力町教会朝拝

序：文脈―近づく主イエスの受難と死

イエス様の神殿での教えが前回の箇所で終わっていました。そして今日のところから新しい区分に入ります。これからいよいよイエス様の十字架の死に至る受難が始まっていくのです。

まず 22 章 1 節には次のようにあります。

「さて、過越祭と言われている除酵祭が近づいていた。」

厳密に言うと過越祭と除酵祭とは違うものです。過越祭はニサンの月の 14 日（私たちが用いている太陽暦では３－４月）に、小羊を屠って食べます。これは出エジプトの際の過越の出来事を記念しお祝いするものです。イスラエルがエジプトを脱出する際、最後の災いとしてエジプト中の初子が撃たれました。しかしイスラエルには予め神様から、その日の夜に小羊を屠って家族で食べるように、そしてその血を家の入口の柱と鴨居に塗るように言われていました。そして神様は血が塗ってある家は過ぎ越され、イスラエルには災いが及ばなかったのです。そうしてイスラエルはエジプトから脱出することができたのです。過越祭はそのような救いを記念し、お祝いするお祭りです。

そして除酵祭は、過越祭の次の日から１週間にわたって行われます。その期間は酵母（パン種）の入っていないパンを食べます。それはエジプトから脱出する際、イスラエルの人たちは時間がなかったので酵母の入っていないパンを焼いて、それを道中の食料として持って行ったことに由来します（出 12 章)。それゆえ過越祭と除酵祭はつながっており、イエス様の時代には一つのもののように言われることもありました。ですから今日の箇所でも「過越祭と言われている除酵祭が近づいていた」と表現されているわけです。

この過越祭はユダヤ人にとって自分たちの救いを記念する最も大切なお祭りであり、多くのユダヤ人がこの時、エルサレムに巡礼に訪れました。高知でもよさこい祭りの際はたくさんの人で賑わいますが、過越祭が行われるエルサレムも同じように多くの人でごった返していたのだと思います。

そしてイエス様はそのような過越祭（除酵祭）のときに、捕らえられ、十字架につけられ殺されることになったのです。それゆえ「過越祭と言われている除酵祭が近づいていた」ということは、イエス様の十字架の死が近づいていた、ということでもあります。

１．主イエスの殺害計画の進行

ではイエス様の死はどのようにして起こったのでしょうか。22 章 2 節には次のようにあります。

「祭司長たちや律法学者たちは、イエスを殺すにはどうしたらよいかと考えていた。彼らは民衆を恐れていたのである。」

イエスを殺そうと企んでいたのは神殿で権威を持っていた祭司長や律法学者たちでした。4 節では「祭司長たちや神殿守衛長たち」と言われています。「神殿守衛長」とは神殿の治安や秩序を維持する役目の人々です。この人たちも祭司階級に属し、「神殿守衛長」のトップは大祭司に次ぐ高い地位にありました。そういう人たちがイエスの殺害を企んでいたのです。しかし彼らはそれをどのように実行す

ればよいかわからずにいました。理由として「彼らは民衆を恐れていたのである」と言われています。民衆はイエス様のことを支持していました。今日の箇所の直前の 21 章 37 節 38 節には次のようにあります。
「それからイエスは、日中は神殿の境内で教え、夜は出て行って「オリーブ畑」と呼ばれる山で過ごされた。民衆は皆、話を聞こうとして、神殿の境内にいるイエスのもとに朝早くから集まって来た。」

このようにイエス様を支持し、熱心にイエス様の話に耳を傾けている民衆を、指導者たちは恐れたのです。特に過越祭で多くの民衆が集まっていました。そのような中でイエスを捕らえるとどうなるでしょうか。民衆が暴動を起こし、自分たちに危害を加えかねない。祭司長や律法学者たちはそのことを恐れていたのです。邪魔者のイエスを殺したいけれども、民衆が怖くて手を出せないという言わば手詰まり状況です。しかしそのような状況を打開することが起こりました。22 章 3 節から 6 節
「しかし、十二人の中の一人で、イスカリオテと呼ばれるユダの中に、サタンが入った。ユダは祭司長たちや神殿守衛長たちのもとに行き、どのようにしてイエスを引き渡そうかと相談をもちかけた。彼らは喜び、ユダに金を与えることに決めた。ユダは承諾して、群衆のいないときにイエスを引き渡そうと、良い機会をねらっていた。」
いわゆるユダの裏切りです。ユダはイエス様の 12 弟子の一人でした。12 弟子の中にはもう一人「ヤコブの子ユダ」と呼ばれる人がいます（ルカ 6:16)。そしてそのユダと区別するためにもう一人の方が「イスカリオテのユダ」と呼ばれ、このユダが主イエスを裏切ったのです。「イスカリオテ」という言葉の意味は諸説あるようですが、おそらく「都会の人」という意味だろうと思われます。イエス様の多くの弟子がガリラヤという田舎出身である中で、このユダは都会（おそらくエルサレム）出身だったのだと思われます。
このユダがイエス様を裏切り、祭司長や神殿守衛長のところへ行き、どのようにしてイエスを引き渡そうかと相談をもちかけたのです。どのようにイエスを殺そうか考えあぐねていた祭司長たちは当然、このユダがもちかけた相談を聞いて喜びします。そしてユダにお金（マタイに福音書によれば「銀貨 30 枚」）を与えることに合意したのでした。ユダもそれを承諾し、群衆のいないときにイエスを引き渡そうと、良い機会をねらっていた、とあります。このようにユダの裏切りが、手詰まり状態だったイエスの殺害計画を前進させることになったのです。

２．ユダの裏切りという謎―サタンが彼の中に入った

このユダの裏切りは新約聖書の大きな謎と言われます。イエス様によって選ばれ、イエス様の最も近くにいた 12 弟子の一人であったユダがなぜ裏切ることになったのか。様々な説明が試みられてきました。まず言われることが、それはお金のためだった、という説明です。確かにユダはイエス様を引き渡す見返りにお金を受け取っています。またヨハネ福音書によるとユダは会計係でした。しかし「彼は盗人であって、金入れを預かっていながら、その中身をごまかしていた」と言われています（ヨハネ 12:6)。彼は一同のお金を預かっていながら、一部を着服し、自分のものにしていたのです。そのような背景を考えると、ユダがお金のためにイエスを敵に売ったという説明もある程度当たっているのかもしれません。しかし、果たしてそれだけなのか、それだけの理由でユダは自分の主であったイエスを敵に引き渡したのか、という疑問も浮かんできます。そこでさらに別の説明がされることがあります。ユ

ダはイエスがイスラエルをローマ帝国から解放してくださるメシアだと期待していたが、そうではないことが分かりイエスに失望した、と言われることがあります。あるいはユダはイエスを窮地に追いやることによって、強制的に神の国をもたらすようにさせたという説明もあります。しかしそれらのどれもが推測の域を出ません。そのようなことは聖書に記されていないからです。では聖書にはなんと記されているのか。ルカは 22 章 3 節で次のように記しています。

「しかし、十二人の中の一人で、イスカリオテと呼ばれるユダの中に、サタンが入った。」

「ユダの中にサタンが入った」。これがルカの記すユダの裏切りの原因です。また同様にヨハネ福音書も「サタンが彼の中に入った」（13:27）と言っています。このことはユダがなぜ、どのような動機でイエスを裏切ったのかを、合理的に、誰もが納得できるように説明しているわけではありません。そういう意味ではユダの裏切りは「謎」であり続けるだと思います。しかし確かに聖書が語っているのは「サタンがユダの中に入った」ということです。「サタン」とは人を神に背かせ、堕落させようとする存在です。そのようなサタンがユダの中に入ることによって、ユダはイエスを裏切ることになったのです。

このことは私たちにとって警告の意味があります。イエスと最も近しい 12 弟子の一人にサタンが入り、イエスを裏切ることになり、イエスを殺そうとする敵の陣営に寝返ったのです。そうであるならば、私たちの内の誰がイエスを裏切ることになってもおかしくない、ということになるでしょう。そうならないために私たちはどうすればよいのでしょうか。なぜユダの中にサタンが入ったのでしょうか。この問いについても明確な答えはありません。しかし、示唆されていることはあると思います。一つはユダは自分の欲望につけ込まれたということです。ヤコブ書 1 章 14, 15 節にはこうあります。

「人はそれぞれ、自分自身の欲望に引かれ、唆されて、誘惑に陥るのです。そして、欲望ははらんで罪を生み、罪が熟して死を生みます。」

ではそのような欲望に引かれ、誘惑に陥ってしまわないためにどうすればよいのでしょうか。イエス様はゲツセマネの園での祈りの場面で弟子たちに次のように言われました。22 章 40 節

「誘惑に陥らないように祈りなさい」。

また 22 章 46 節でも「なぜ眠っているのか。誘惑に陥らぬよう、起きて祈っていなさい。」と言われています。これは先週学びました 21 章 36 節のイエス様の勧めとつながるものです。

「しかし、あなたがたは、起ころうとしているこれらすべてのことから逃れて、人の子の前に立つことができるように、いつも目を覚まして祈りなさい。」

「いつも目を覚まして祈る」。これこそ、私たちが誘惑に陥らないためになすべきことです。私たち自身にはサタンの誘惑に打ち勝てるような力はありません。信仰者であっても弱いのです。しかしだからこそ目を覚まして祈る。イエス様が主の祈りの中で教えてくださったように「我らを試みに遭わせず（陥らせず）、悪より救い出し給え」と祈り続けたいと思います。

３．主イエスに対するサタンの試み―主イエスの勝利

ユダはサタンの誘惑に負け、その中に陥ってしまったと言えるでしょう。しかしサタンの本当の狙いはユダではなく、主イエスご自身でした。それは今日の箇所と 4 章 13 節とのつながりを考えるとわかってきます。イエス様は荒れ野で悪魔、すなわちサタンからの誘惑を受けられました。イエス様はそれれらの誘惑にすべて打ち勝たれました。その最後のところが４章１３節ですが、次のようにあります。

「悪魔はあらゆる誘惑を終えて、時が来るまでイエスを離れた。」

そしてこのところと、今日の箇所「サタンがユダの中に入った」ということがつながっているのです。荒れ野においてサタンのイエス様に対する誘惑はすべて失敗に終わりました。しかしサタンはまだ諦めたわけではなかったのです。ただ「時が来るまでイエスを離れた」。そして今日のところでついに「時が来て」、サタンが再び現れる。そしてイエス様の 12 弟子の一人であるユダの中に入るのです。その目的は言うまでもなくイエス様を誘惑するため、そして神様の御心に背かせるためです。それゆえここから始まるイエス様のご受難は、サタンの主イエスに対する最後の誘惑（試み）の時、また主イエスとサタンとの対決の時であったと言うことができます。ではその対決はどちらが勝利することになったのでしょうか。

イエス様はこの後、裏切ったユダの手引きによって祭司長たちの手に渡され、ついには殺されてしまいます。それゆえ一見サタンがイエスに勝利したかのようにも思えます。イエス様は敵の手に渡り、殺されてしまったからです。しかし本当にそうなのでしょうか。サタンが勝利し、主イエスは負けたのでしょうか。実はそうではありません。さきほど申し上げたように、サタンの目的はイエス様を神の御心に背かせることにありました。イエス様を殺すことがサタンの目的ではありません。むしろ十字架に至るまでの苦しみの中で主イエスを試み、主イエスを神の御心から逸らせること、そうして神の救いの計画を台無しにすることがサタンの目的だったのです。そのように考えるならば、主イエスは十字架に死に至るまで神の御心に従い抜くことによって、サタンの試みに勝利された、と言うことができます。主イエスの十字架の死こそが、私たちを救うための神のご計画の中で成し遂げなければならないことでした。イスラエルが出エジプトの際、屠られた小羊の血によって災いから過ぎ越され、救われたように、主イエスの十字架の死とその血も、私たちが救われるために必要不可欠なものだったのです。イエス様は過越の小羊として、私たちの救いのために十字架で血を流し、死んでくださいました。最も近しい仲間であったユダに裏切られるというサタンによる試みにも関わらず、主イエスはご自分の使命を成し遂げてくださったのです。

私たちはサタンの誘惑に対して弱い者であり、目を覚まして祈り続ける必要があります。しかし主イエスはすでにサタンの最後の試みにも勝利され、十字架の死によって私たちの救いを成し遂げてくださったのです。

祭司長たちはユダから提案、すなわちサタンからの提案を喜びました。これでイエスを殺すことができると思ったからです。しかし私たちが本当に喜ぶべきは主イエスが成し遂げてくださった救いです。主イエスがあの十字架の死において私たちの救いを成し遂げってくださったという福音。喜びの知らせ。私たちはこのことをこそ喜び、感謝しつつ歩んでいきたいと思います。